

海外日本語教育実習を終えて

信州大学大学院 2 年 斎藤有紀恵

学部 4 年 石田舞子・於本七瀬・城間友美・
中野真樹・前澤美樹

学部 3 年 平野涼子・三間美奈子

学部 2 年 門脇恵利子・向出真理子・矢嶋直子
(2001 年 11 月 21 日執筆・所属は当時)

実習をふりかえって

信州大学大学院人文科学研究科 2 年 斎藤有紀恵（言語文化専攻）

1. スピーチコンテスト（於 誠心研修院）

私は審査員としてスピーチコンテストに参加することになった。審査項目は「訴える力（メッセージ性）30」「話の進め方 30」「覚えているかどうか 20」「表現力 10」「発音 10」の 5 項目（100 点満点）であった。事前に審査のポイントについて話し合っていたが審査員は初めての経験であり、責任感・緊張感とともにコンテストに臨んだ。

16 人のスピーチはそれぞれがとても個性的で興味深いものだった。旅行やホームステイ体験、大学生活など題材として取り上げたものは同じでも一人一人の主張は異なる。あるものには共感し、あるものには教えられた。そして母語は違うが大学生として感じたり考えたりすることは同じだと思うとうれしかった。また何よりも驚いたのはその日本語力の高さである。留学経験の差はあるにせよ、彼女達は 2、3 年という短期間にスピーチを行う力を身につけている。日韓両語の文法体系は似ていると言われるがそれだけではなく、やはり本人の努力があってこそ得られるものだろう。コンテスト直前まで真剣に原稿を見直し、そして生き生きとした表情で話をしている姿が印象的であった。

審査は本当に難しく特に基準の設定に悩んだ。また項目ごとに点数はつけることができても総合的な評価となると困難を極め、コンテスト終了後の審査員全員による話し合いはもめにもめた。学生生活の中で評価するという経験はそれ程多くは得られない。改めて評価することの難しさを実感した。

2. 高級日本語会話（津崎先生 於 誠心研修院）

この授業はミニドラマの発表会であった。6 本の短編と 1 本のコンテスト受賞作品の計 7 本だったが、みんな楽しそうに演じていた。衣装や小道具もとても凝っていて、見ている私は授業であることを忘れて笑い楽しんだ。台詞には「助言を求める一助言

をする」「不満を述べる－弁解する」「提案に対する同意と反対」等の機能が含まれており、学生はそれを楽しみながら学びミニドラマという形で実際に使う。登場人物は孫悟空やダーウィンなど非現実的であるため学生はかえって役割になりきれるという。自身の経験から外国語学習には困難さばかりが伴うと思っていたが、楽しみながら学ぶよい実践例を見ることができ大変勉強になった。

3. 中級日本語会話（津崎先生 於 D302 教室）

見学させて頂いたクラスではインフォメーションギャップを利用した道教えのタスクが行われた。ペアを組み地図を見ながら電話で道案内をするという設定である。私は人数の関係で急遽参加することになったのだが、突然のことで多少緊張していた。相手も緊張していたようだ。だが道を教える側、尋ねる側と交替しながら一つずつタスクを進めていくうちに少しずつ緊張が解けていった。道教えの際、言葉を選びながら話しているのに相手になかなかうまく伝わらないことがあった。様々な理由が考えられるが説明役である私に問題があった。つまり短い時間で相手を知り、相手の立場になって話すということができていなかったように思う。母語話者と非母語話者という関係において、母語話者は相手の理解のために、話すスピードや語彙選択、相手の反応等多くの点に配慮しながら話さなければならない。短時間ではあったが学生の一人として輪に入れたのは貴重な経験であった。

後半は見学者を含めてグループを作り、大学周辺にある店の位置を日本人学生に教えるというタスクが行われた。ここでテキスト上の練習から実際使用へと移行した。カトリック大生にとっては会話練習となり、我々にとっては新しい情報を得る機会となった。大学周辺について知るだけではなく、カトリック大生の学生生活が垣間見えた楽しい時間だった。会話の中に「健忘症」という言葉が出てきた時には驚いた。

クラス運営、授業進行についても多くのことを学べたと思っている。学生が教室に入ってきた瞬間からクラスは始まっており、教室全体を先生が自然にコントロールされていた。授業中も一人の疑問をクラスのものとして取り上げ全員が理解できるようもっていく。学生達が何につまずいているかを瞬時に判断し、補足説明を加える。また時々使用される韓国語は、学生の理解を促すのに効果的に働いているようにみえた。

4. おわりに

まずこのような機会を与えてくださった諸先生方に感謝申し上げる。本実習は韓国における日本語教育の実状を知り、日本国内における日本語教育との相違点について更に深く考えるきっかけとなった。また実習を通じて自分の未熟な部分がさらに明らかとなり、その点については今後克服すべき課題として取組んでいきたい。

韓国における日本語教育実習の反省

信州大学人文学部 4 年 石田舞子（日本語教育学専攻）

1. はじめに

このレポートでは、韓国研修旅行中に行われた日本語教育実習の反省をする。海外での教壇実習は沖研究室にとっても初めてということで、頼りにするものもなく、手探りで準備は進められた。その過程と、私の感じたことを、実習前と実習後に分けて述べていきたい。

2. 実習までの道のり

2. 1. トピック決定まで

韓国研修旅行が行われるのを知ったのは、本年度前期、日本語教育実習の第一回講義においてであった。まさか海外での教壇実習があるとは思っていなかったのが、大変驚いた。その時点では、留学生センターでの実習もまだだったので、同時進行でやっていくことができるのかどうかとても不安だったが、滅多にない機会をいただけたのは、幸運なことであると思った。

韓国での実習は、教科書を使ってある文型を教えるというのではなく、イマーション教育の実践を予定している、と沖先生から伝えられたが、初めて聞く言葉にとまどいを覚えた。イマーションというのは「浸りきる」という意味で、典型は、学習対象の言葉で教科を教えることであるという。つまり、我々の場合、日本語で「何か」を教えるということである。その「何か」をどうするかが問題であった。大衆的すぎるものはよくないとのことだったので、余計に難しく感じてしまい、なかなか案が浮かばなかった。また、自分自身がよく知らないことを教えることはできないので、自然と日本語に関する話題に傾いていってしまった。

授業で扱うトピックを決めるにあたり、まずは実習生一人一人がレジュメを作成、発表をし、そこから話し合い、絞りこんでいった。途中までは二班にわかれ、それぞれ別のトピックを取り上げていたが、最終的に一つに絞るのか、それとも二つの指導案を作るのかということが問題になった。結局、日本語の感謝・謝罪表現という話題一つに絞ることになったが、実習生の人数が多く班がいくつかできるようであれば、別々に指導案を作ってもいいと思う。

実習は、カトリック大学校の先生方のご厚意のおかげで、全部で三時間いただけることになっていた。そこで、一時間を松本・信州大学事情というトピックで行い、残り二時間を感謝・謝罪表現にあてることになった。

2. 2. 指導案作成

松本・信州大学事情に関しては、教えたことが比較的是っきりしていたが、指導案作成となると、なかなか進まなかった。しかし、教材として自分たちで撮影したビ

デオを使うことに決めてからは、それを中心に授業を組み立てていくことができた。問題は、もう一つのトピックの方であった。感謝・謝罪表現を扱うと決めたものの表現そのものに注目するのか、人間関係による表現の使い分けに注目するのか、それとも日韓比較を行うのか、何を中心とすべきかで悩むことになった。また、教えるためには膨大な知識が必要になるため、さまざまな参考文献にあたらなければならないのも大変であった。もっと前から勉強しておけば、と思うことがあった。

毎日のように集まり、勉強会をしていくうちに少しずつ指導案が形作られていった。最終的に、感謝の場面で使われる謝罪表現を扱うことに決定し、指導案を作っていたが、9月の中頃は、教材もろくにできておらず、説明方法も複雑すぎるという問題が残されていた。そのような状態で模擬授業を行うことになった。

2. 3. 模擬授業

今思えば、はじめの指導案は、とても授業が行えるようなものではなかった。実際やってみたものの、ほとんど授業の形にならず、もうやめたい、と思うほどであった。模擬授業の前は、複雑かもしれないが、自分たちが納得できる説明方法にしたつもりであった。しかし、頭で描いていたものと実際は異なり、説明しながら自分でもよくわからなくなっていった。

模擬授業は全部で四回行った。一回終わるごとに反省会を行い、説明方法や教材の使い方について検討を重ねた。そして、説明をシンプルにしていって。シンプルにするということは、難しい内容を省くということではなく、事の核心を簡単な言葉で説明するということである。難しかったが最後にはパネルなども使い、わかりやすい説明ができるようになったと思っている。

正直に言って、それまでの半年より、模擬授業をやりながら指導案に手を加えていった一ヶ月弱の時間の方が内容が濃く感じられた。実習生が集まって話し合う時間ももちろん大切だが、実際に声を出し、動いてみなければわからないことがたくさんある。参加している人たちから意見をもらうこともできるので、模擬授業は貴重な時間である。そこで、来年は余裕を持って模擬授業を行ってもらいたい。その際に可能ならば、何人か留学生に参加してもらうのがいいだろう。日本人とは違った視点で意見を述べてくれると思う。模擬授業で得た意見は指導案作成におおいに役立つはずである。また、授業の様子をビデオで撮影しておくことも有効である。後で客観的に見ることができるので、自分の欠点を発見するのにも役立つ。それらを最大限に活かすためにも、前期中に模擬授業をし、夏休みにじっくり指導案を練り直すようにスケジュールを組むのがよいと思う。

3. 実習を終えて

実習は、韓国滞在の五日目に一時間、六日目に二時間連続で行われた。まず始めに

松本・信州大学事情の授業をし、次の日に、感謝の場面で使われる謝罪表現についての授業を二時間続きで行った。

ぎりぎりまで練習をしていたが、やはり不安で、緊張したまま授業に臨んだ。焦りそうになった時は教室を見渡し、学習者の様子を見ることを心掛けた。なんとか授業を進めることができたのは、説明を真剣に聞いてくれる様子や、時にこぼれる笑い声に助けられたからだと思う。教壇に立ってみて、授業は一方的な押し付けではなく、双方向のやりとりが大切なのだと実感した。

授業中に気づいたことや終わってからわかったことなど、反省点はたくさんある。それを以下に述べていきたい。

まず、大きなことから言うと、授業をする目的を忘れてはいけないと思う。指導案作りも模擬授業も本番も、真剣にやっていたといえるが、授業を形にするのが精一杯で、時に全体を見る視点が抜け落ちてしまっていた気がする。何を伝えたいのか、ということ常を頭に片隅に置いておき、その上で、授業の計画を立てることが大切ではないだろうか。

授業の計画を立てる上で重要なことのひとつとして、実習日を研修期間のどこに置くかという問題がある。実習日によって授業の内容にも変化が出てくるのでないがしろにはできない。例えば、前半に授業を行うとしたら、交流が深まっていないことを前提にして考えなければならないが、後半はその逆になる。また、一時間目と二時間目を別々の日にするならば課題を出すことができるが、一日の中で連続してやる場合はそれができない。

他のイベントとの調整が難しいかもしれないが、上に述べたような問題があるので、カトリック大学校側とこまめに連絡をとり、できるだけ早い段階で実習の日程を決めるべきである。

授業を計画するためには、まずトピックを決めなければならないが、こちらが伝えたいことと、学習者が知りたいことを同時に満たすようなものが理想的である。今回はできなかったが、トピックを決めるにあたっては、ニーズ調査が必要ではないかと思う。また、対象クラスの学習者の既習事項も把握しておくべきである。こういったことも、カトリック大学校の方々に協力していただかなければできないことであるので、日ごろから密なやりとりをしておき、早めをお願いをすることが大切である。

次に、実際に韓国で教壇に立ってみての感想だが、実習後すぐに思ったのは、予想外の出来事が多く、対応が難しかったということである。まず、学習者の日本語のレベルが想像していたよりも高く、説明を理解するのも容易な様子であった。問題を解くのも非常に早く、結果的に時間が余ってしまった。余っても数分程度だろうと思っていたために対処法もなく、その場しのぎのことしかできなかった。予測が甘かった

としか言いようがない。時間が余った場合、逆にのびてしまった場合にどうするべきかは、当然考えておかなければならなかったことだと反省している。また、学習者のレベルに合わせて問題の難易度を変えることもできるような指導案を作っておくべきであった。

指導案はあらゆる事態を想定し、臨機応変に対応できるようにしておかなければならないが、それでも思わぬ事態が起ることもあるだろう。そのような場合でも、ふだんから知識を蓄積しておけば乗り切ることができるはずである。授業で教える内容が1だとしたら、その背後に100の知識を持っていないと、柔軟な対応をすることは難しい。実習を通して、自分の勉強不足を痛感した。

最後に、教材について述べておきたい。今回は自分たちで撮影・編集したビデオや地図、パネル、手製のワークシートなどを用意していった。その中で、最も学習者の目を引き付けることができたのはビデオだったと思う。言葉ではなかなか伝わらないことでも、映像でなら伝わる場合もある。映像の持つ力をより効果的にするためには、撮影や編集に工夫を凝らす必要があるだろう。その他の教材も、活動と上手に絡めて導入すれば、授業がマンネリズムに陥るのを防いでくれる。どのような教材を授業のどの段階で導入すべきかということは研究する価値があると思う。

4. おわりに

一番反省しているのは、授業を成功させなければ、という思いに囚われ、目の前のことしか見えていなかったことである。つまり、この実習がカトリック大学校のコースデザインのどこに位置づけられ、そして学習者にとってどういう意味を持つのかといったことを考える余裕がなかったのである。来年度の実習生は、授業は学習者のためのものであるということを忘れず、俯瞰的な視点を持って実習に臨んでほしい。

授業は穴だらけだったが、そこから得たものはいろいろある。我々の行った事がこれから実習をする後輩たちの役に立つのなら幸いである。

貴重な経験

信州大学人文学部4年 於本七瀬（日本語教育学専攻）

学習者に対して何を教えればいいのか、相手には何が必要なのかということを認識することは容易なことではない。今回の実習を通して改めてその難しさを実感したような気がする。韓国での実習をすることになった私達4年生は、授業のテーマ決めに4月から始め、夏休み期間中も入念に話し合いを進めてきた。実習をするにあたって特に気を使ったことは、日本語を勉強する韓国の学習者にとって理解しづらいところはどこなのかということだった。それを理解する為には「韓国語」を知る必要があった。学習者の母語の特徴を知らなければ、教師が学習者の気持ちになって教えること

は出来ないし、彼らにとって日本語の何が難しいのかということも把握できないだろう。しかし、私達実習生は、韓国語の勉強をしていなかった。そのために、韓国語母語話者であり、大学院生の李さんには授業の準備段階でも大変お世話になった。日本語を勉強している時にどの部分が理解しづらいのか、韓国語と日本語の相違点はどこにあるのか、様々な事に対して質問し、相談にのっていただいた。

日本語では感謝の場面で謝罪表現を用いることは日常生活の中でよくあることだ。しかし、韓国の場合、これはとても不自然であるという。この違いに私たちは着目した。そこで授業テーマを「感謝の場面で用いられる謝罪表現」とした。また、私たちの計画の中で「実際使用」ということを最初から意識していた。授業で行った表現をその後の交流の中で使用してもらい、定着を図ろうとしていた。しかし、実際の行動予定を見てみると、メインの授業は滞在6日目に予定されており、その狙いは諦めなければならなかった。しかし、そこをプラスに考えて、5日間の交流の中で出てくる様々な表現の中に「感謝の場面で使われる謝罪表現」もあるはずで、最後の授業でまとめとして疑問も解消してもらおうということになった。

私たちが授業をさせていただく前にカトリック大学校での実際の日本語教育の現場を見学させていただくことが出来た。これは本当にありがたいことであり、大きなヒントを与えられることにもなった。

まず、2日目の津崎先生の「高級日本語会話」ではシュミレーション・ロールプレイを主体とした授業で、機能シラバスをドラマでやるという方式をとっていた。津崎先生によると、中・上級の学習者になってくると「待遇表現」の学習が大変困難になってくるらしい。そのために効果的な方法を考えたのだそうだ。外国語教育で特に重要なのが「楽しくやる」ということで、しかも積極的に参加しようとしなければ学習者にとって意味がなく、劇の中でその役になりきることが出来なければ学習効果は望めないという。私達が行う授業の中でも実際の場面を多く見せることが狙いでもあったので、ロールプレイをする予定であった。より実際の場面に近づける為にもしっかりと演技しなければならないと感じた。

3日目の中野先生の「中級日本語会話2」の授業を見学させていただいた時には、先生の「学習者を引き込む力」というものを強く感じさせられた。「～のような」「～みたいな」という表現の習得がポイントだったが、絵を描かせたりゲームをさせたりして楽しんで習得できるような工夫がされていた。

また、今回の交流期間の中で、カトリック大学校の学生の方が3回の韓国語講座を開いてくれた。恥ずかしいことに私は今まで韓国語を全くと言っていいほど話せないし書くこともできなかった。「外国語学習者」という立場になってみることは教える立場に立つものにとっては必ず経験しなければならないことだというように感じた。そ

して、母語話者だからこそ、普段考えもしないようなことを学習者に尋ねられてしまい答えに詰まってしまうというようなことはどの言語を教えるというときでも立ちふさがり問題なのだという事も認識できた。言語を教える時には、学習者の言語を理解しておく必要がある。私には特にこの部分が欠けていた。

さて、6日目に行われた「感謝の場面で用いられる謝罪表現」の授業は実際どうだったかという点、まず当初中級レベルの学習者を予定していたのが、参加者は上級者がほとんどであった。これはショックな事であった。私たちは感謝の場面で「ありがとう」ではなく「すみません」が出てきてしまうということの説明を1時間、次の時間に「すみません」ではなく話す相手によっては「ごめんなさい」が出てくる時もある事を説明する予定で授業案を作成していた。しかし、ふたを開けてみると、この内容は中級の前期のレベルであり、すこし易しすぎたらしい。残念であった。韓国に来る前にもっと密に連絡をとっていればこのようなことにはならなかったのかと悔やまれた。しかも、実際に、韓国の中でも感謝の場面で謝罪表現を用いるという人はいないわけではなく、比較的年齢層の高い人の中では使われる場合もあるらしいということを知った。これは勉強不足だったと思う。カトリック大学校の中級レベルの学習者にとって適切なテーマは何だったかという質問に対して、「ありがとうございますです」と「ありがとうございますました」の用いられる場面の違いなどは面白かったのではないかと津崎先生にアドバイスを頂いた。

実習では、「松本・信州大学事情」という授業を1時間設けさせてもらった。これは、5日目に行われたが、できれば交流が本格的に行われる前のもっと早い段階でこの授業をやらせてもらいたかった。新しい情報が多く学習者も楽しめると思ったからだ。そしてこの授業の多くの問題点は学習者の知りたい情報をしっかりと組み込んでいなかったという点だ。信州大学の留学生に関する詳細情報、留学生の生活、住宅情報など、質問されたが上手く説明することができなかった。学習者の立場になって授業を作っていかなければならなかったのに、狙いがはつきりしない内容になってしまったと思う。

実習全体を通してまずは私の未熟さを痛感させられた。人に教えていくということの難しさを改めて感じ、どんな状況にあっても対応できるだけの深い知識を身に付けていることの必要性を認識した。人間として、一人の人の向かい合う姿勢とは、優しさをもって相手を本当に知ろうとすること、そして相手にも真剣に自分を知ってもらおうとすることだということであり、その素晴らしさと難しさを実感することとなった。私は、生身の人間同士の対話が一番自分自身を成長させてくれるものなのだと思う。今回のカトリック大学校での心の交流を通して私はまた素晴らしい出会いを経験し、沢山のことを与えられた。感謝の気持ちでいっぱいである。本当に心からお礼を

言いたい。私達の日本語教育実習は初めての試みであり、課題も多く残ってしまったが、私は、カトリック大学校と信州大学の未来にとって重要な役割を果たしたとも思っている。今回の実習の経験を次の大きなステップへとつなげていって欲しいと願っている。

韓国日本語教育実習反省と今後の課題

信州大学人文学部 4 年 城間友美（日本語教育学専攻）

1. 日本語教育実習の目的

日本語教師を目指す日本語教育学専攻学生として日本語教育実習を行うことは、これまでの自分を見直し、これからの自分を考えるという意味で必要な試練であると考ええる。試練といっても実習はあくまでも受け入れ先のご好意によるものであるため、実習をさせていただけるだけでも感謝すべきことである。

実習はその名の通り、教科書や授業・講義からだけでは学べないことを実際に体験して学ぶことである。日本語教師に限らず、何事も知識だけ、経験だけというのでは偏りがある。両方をバランスよく持ち合わせる事が理想であろう。その意味で実習は日本語教育の現場をじかにみて、体験することができる。実習生はそのことを喜ぶと同時に自分の立場と責任を自覚しなければならない。自分にとっては練習台のつもりでも、学習者にとっては一度しかない貴重な授業である。実習生の不注意やふとした何かのきっかけで日本語学習の道を捨ててしまう可能性もなくはない。そのような危険な可能性や責任も実習にはついてくる。しかし、実習によって実習生が得るものは、他の何からも得られるものではなく、また学習者は未来の日本語教育の可能性を広げるという意味で利益を得ることになるだろう。受け入れ先の先生方や学習者の迷惑にならないことを念頭において、今の自分ができる精一杯のことをやる気持ちで実習に臨む姿勢が大切である。

2. 韓国日本語教育実習の流れ

2001 年度の日本語教育実習の授業が 4 月の第三週から開始された。受講生は日本語教育学専攻学生 5 名と日本文学専攻学生 1 名の計 6 名である。本年度の大きな目標は 6 月の信州大学留学生センターにおける日本語教育実習と 11 月の韓国カトリック大学校における韓国日本語教育実習の二つであった。開始直後より、「日本語に浸りきる」という意味でのイマージョン教育を目指し、計画を立て始めた。

前期の留学生センターでの実習と平行するかたちで韓国日本語教育実習の準備が行われた。5 月中旬にはカトリック大学校への実習依頼と問い合わせの連絡を行い、授業で扱うトピックとテーマを決定した。トピックは日本語による日本人の言語行動の紹介ということで、テーマは「日本人が謝罪表現を感謝の意とする具体的場面」となり、

その設定をするというのが当初の目的であった。これは対象を初中級の日本語学習者と仮定し、学習者が、日本語・日本文化と接する際に文化摩擦を起こしうる場面を考えたとときに、必要な情報なのではないかとの予測から決定したものであった。

最終的に実習生は日本語教育学専攻の5名に決定し、一班(石田・城間・前澤の3名)・二班(於本・中野の2名)のチームティーチングを行うこととなり、8月・9月には謝罪的感謝表現についての理解を深める為の自主ゼミを開いた。実習直前の10月には、カトリック大学校での実習の詳細が決定した。時間数は三時間で対象クラスは中級日本語会話である。一時間目を「松本・信州大学事情」と称し、自分たちの住む長野県松本市と信州大学を紹介し文化や環境を知ってもらうことを目的とし、二・三時間目は「感謝の場面で使われるすみません」をテーマとして授業を進めるというのが我われ実習生の計画であった。

10月末から11月はじめにかけて行われた韓国カトリック大学校と信州大学間の韓日国際親善交流の一環として我われ実習生の日本語教育実習を企画していただいた。はじめに一班は津崎浩一先生、二班は中野敦先生による高級日本語会話の授業を参観させていただき、実際の授業実習は11月1日に「松本・信州大学事情」、2日に二時間連続して「感謝の場面で使われるすみません①」と「感謝の場面で使われるすみません②」を行った。

3. 実習の反省

一班の担当したクラスは津崎浩一先生の中級日本語会話のクラスで、生徒数は20名弱であった。「松本・信州大学事情」は、日本地図とビデオを教材・教具とし、主に実習生側の紹介で授業を進めた。内容は実習生の自己紹介と地図とビデオによる松本市と信州大学の紹介である。学習者の反応は、はじめのうちこそ興味を持ってくれたようだが、後半には実習生側の一方的な授業に退屈してきたようであった。この授業での反省としては、せっかくの視覚教材を生かしきれなかったことである。ただでさえ実習生側の一方的な説明になりがちな授業であったので、視覚教材、特にビデオの完成度の低さが学習者の興味を激減させたようである。また、信州大学の紹介でも、一般の日本人学生の生活状況や、留学生の様子などをもっと事細かに撮影するべきであった。津崎先生からは松本の物価やアパートの家賃などもっと留学生に必要な情報を取り入れてはどうかというアドバイスをいただいた。今回の授業では、一番重要な日本語学習者が実際に松本で暮らすという設定が抜け落ちていて、結果的に表面的な、単なる観光案内のようになってしまった。学習者側に立って、彼ら・彼女らが必要としているもの、興味あるものは何なのか考えるということが何よりも重要であると感じた。また、退屈な授業にならないように学習者と相互にコミュニケーションしながら授業を進めていく必要があると痛感した。

「感謝の場面で使われるすみません①、②」は中野敦先生の中級日本語会話のクラスで行った。実習生製作の謝罪的感謝表現の具体的場面を集めたワークシートを教材とし、場面提示用のビデオとパネルを教具として扱った。この授業では場面ごとに学習者の参加を求めたので、先の「松本・信州大学事情」に比べると実習生側の一方的な押し付け状態は免れたように思う。しかし、学習者の学年にばらつきがあったこともあるが、内容があまりにも簡単すぎたようである。我われ実習生の予想は「韓国にはお礼の気持ちを表現するときに謝罪のことばを使う習慣はないだろう、それなのに日本語ではある。これを理解するのにには時間がかかるに違いない。」ということであったが、実際の教室では予想を裏切り学習者はすぐに答えをだしてしまった。ワークシートの問題も工夫が足りず、簡単な上に単調であった為に、学習者は手持ち無沙汰のようであった。それなのに我われは余った時間を有効利用する手段を持ち得てなかったので間を持たせることに必死になってしまった。

自分たちが予想していた学習者のレベル、状況、時間配分その他諸々のことが全く予想はずれであったことも反省材料となるが、何よりもそれらのことにその場でうまく対処する力が不足していたように思う。一つのことが少しずれただけで、全てのことが狂ってしまい、ただでさえ緊張しているのが焦りで余計に收拾がつかない結果となってしまった。実習前に何度も沖先生から「準備は、余りはしても、足りなかったということにだけはならないように。」と何度もご指導いただいたにも関わらず、このように反省だらけの実習となってしまった。

4. 今後の課題

今回の実習全体の反省としては、特に

- ・ 授業内容のかたより、未熟さ
- ・ 学習者のニーズ、レベルの認識不足
- ・ 時間配分のあまさ
- ・ 状況にあわせて柔軟に対応する力不足

が挙げられると感じた。これらを今後改善していくためには、まず学習者を「知る」ことが必要であろうと思われる。学習者を予想するだけではなく、徹底的なリサーチが必要なのではないか。学習者がどんな人々であるかはもちろん、どういう目的で、どういう日本語を習得したいのか、事細かに知ることにより、おのずから彼らの興味あるもの、求めることが浮かび上がり、実習生の思い込みや押し付けは軽減するにちがいない。またそれと同時に思いもよらない事態に直面したときにパニックに陥らないよう、事態に対応できる機敏さと、次々に事態を展開するための知識が必要である。

実習を終えての反省はつきないが、学んだことは多く、これまでの思い込みや考え方を打ち破り、学習者とじかに触れ合うという機会を持てたことにより、新しい自分

をみつけることができた。今後は今回の反省を生かし、改善すべきは改善し、新しいものは次々と柔軟に吸収していきたい。

韓国日本語教育実習を終えて

信州大学人文学部 4 年 中野真樹（日本語教育学専攻）

1. はじめに

カトリック大学校と信州大学の日韓学術交流は、信州大学側の視点に立つと、「韓国日本語教育実習」という側面を有していた。ここでは、今回の交流を実習という観点から捉え直し、その中で得たものや気づき、反省点を明らかにしたい。これは、今後の自分のあり方を考えるための材料になるように、また、来年以降の実習生の活動がより良いものとなるように願って書くものである。

「韓国日本語教育実習」とは、何だったのか。また、どのような意義があったのか。あらためて振り返ってみると、一口で実習といってもそれは様々な捉え方ができるということに気づく。今回の大学間交流全体を実習として捉えることもできるし、教壇実習だけに観点を絞ることもできる。また、実習の意義も、実習生にとっての意義、学習者にとっての意義など観点を分けて捉えることができる。

このように今回の実習を多様な観点から捉え、整理しながら反省を述べていきたい。

2. 韓国日本語教育実習の概要

先に、今回の大学間交流全体を実習として捉えることもできる、と述べた。そのような観点から捉えた実習を「韓国日本語教育実習」と呼ぶことにする。まずは、その概要を述べる。

2.1 カトリック大学校・信州大学日韓学術交流週間の主な日程

韓国日本語教育実習は交流全体と重なるものであるので、まずは交流週間の日程を確認しておきたい。交流期間は 10 月 28 日（日）から 11 月 3 日（土）の 7 日間で、交流週間における主な日程は以下のとおりであった。

<主な日程>

10 月 28 日（日）来韓

10 月 29 日（月）カトリック大学校学生による日本語スピーチコンテスト、授業見学、
歓迎会

10 月 30 日（火）第 1 回韓国語講座、信大生 2・3 年生実習（フリー・トーキング）、
授業見学

10 月 31 日（水）市内見学、ホームステイ

11 月 1 日（木）第 2 回韓国語講座、信大生 4 年生教壇実習「松本・信州大学事情」
(50 分×1 コマ)

11月2日（金） 第3回韓国語講座、信大生4年生教壇実習「感謝の場面で使われる『すみません』」（50分×2コマ）、送別会

11月3日（土） 帰国

3. 教壇実習の概要

教壇実習は、韓国日本語教育実習の重要な活動の一部として位置付けられる。その教壇実習の概要について述べる。

◎実習生 信州大学人文学部日本語教育学専攻4年の5名。

◎学習者 カトリック大学校日本語日本文化専攻2年生から4年生。1クラスにつき15から20名の学生が参加した。（クラスによって人数が異なった。）

◎実習日時・授業題目

11月1日（木）「松本・信州大学事情」50分×1コマ

11月2日（金）「感謝の場面で使われる『すみません』」50分×2コマ
1クラスにつき合計3コマを教壇実習の時間としていただいた。

◎実習形態 5名の実習生を2グループ（2人と3人）に分け、それぞれのグループが1クラスずつ担当して授業を行った。2クラスそれぞれの授業内容は同じである。（もちろん、実習生や学習者の人数、授業担当者の性格など様々な要因により、実際の授業展開が全く同じになることはありえない。）

4. 韓国日本語教育実習の意義

韓国日本語教育実習は、誰にとってどのような意義があったのだろうか。実習生にとっての意義と学習者にとっての意義に分けて考える。（なお、この場合の実習生とは、信州大学の学生全てを指す。）

4.1 実習生にとっての意義

日本語教育学専攻の学生にとって、今回の実習をしたことの意義は大きい。まずは、教壇実習の経験をする事ができたということが挙げられる。これは4年生のみがその機会を得た。教壇実習をさせていただけるということは、実際に学習者を目の前にして日本語を教える体験ができるということだけではない。1つの授業を作る過程を体験できるということでもある。学習者のニーズやレベルを考えて授業のトピックを選んだり、授業案を練ったりなど、授業を作っていく過程も私たち実習生にとっては非常に貴重な実習となるのである。

また、この交流全体を通して「平明な日本語でできるだけ伝えたいことの意味を変えずに表現する」という訓練ができたことも大きい。もちろん、教壇実習においてもそれは意識されたが、教壇実習に限らず、カトリック大学校の学生と話をする機会が豊富にあった。しかも、様々なレベルの学習者と触れ合えたので、相手に合わせてスピーチ・コントロールをするという経験もできた。これは、全学年の学生が得ること

のできた経験である。

さらに、海外における（今回の場合は韓国における）日本語教育の現場を知ることができた、という意味も大きい。実際に行われている日本語の授業を見学させていただくこともできた。

4.2 学習者にとっての意義

次に、カトリック大学校日本語日本文化専攻の学生（以下、学習者）にとってはどのような意義があったのか、考える。

第一に挙げられるのは、日本語の実際使用の場が豊富に得られたということであろう。普段の教室活動の授業では、学習者の「日本語で伝えたい」という欲求や、「どうしても日本語で伝えなければならない」という差し迫った状況は作りにくいのではないだろうか。今回の交流では、私たち日本人学生（韓国語が話せない）と一緒に行動する機会が多く、日本語で伝えるしかないという状況が簡単に作られた。また、教壇実習に参加することも、日本語での説明を聞きながら、あるいは日本語で質問しながら何らかの情報を獲得することであり、やはり日本語の実際使用にあたると思われる。

また、日本人の自然な会話をたくさん耳にする機会にもなっただろう。そして、密に交流することによって相手をもっと理解したい、自分の気持ちを伝えたい、という欲求から、日本語学習の意欲がより高まったと思われる。

5. 教壇実習について

交流の一環としても捉えられる教壇実習であるが、実習生からすれば最も力を入れて準備に取り組んできたのもこの教壇実習である。ここでは、教壇実習についての反省や気づきをいくつかの項目に従って述べていきたい。

5.1 授業題目

教壇実習で扱うトピックを決める際に最も意識したのは「イマーション教育」ということである。イマーションとは、「immerse＝浸りきる」という意味で、学習者が日本語によって日本語以外の科目の授業を受け、それに浸りきることで日本語の実際使用を促すことを狙った教育のことである。今回、韓国日本語教育実習をするにあたり、実際使用を十分に生かした実習となるようにと「イマーション教育」を1つのキーワードとして準備をしてきた。学習者は交流全体を通して日本語の実際使用の機会が豊富に得られるということはすでに述べた。さらに、教壇実習も実際使用の場として捉え、授業のトピックを日本語以外のものにしようと考えたのだ。

結果的に「松本・信州大学事情」と「感謝の場面で使われる『すみません』」を授業題目とした。「松本・信州大学事情」については、今後交流を続けていくカトリック大学校の学生に信州大学について興味を持ってもらうことは必然性が高く、「浸りきれ

る」トピックだったと思う。また、国は具体的な地域や人から成り立っているが、この授業を通して日本の多様な地域性や具体性を実感してもらえたと思っている。

「感謝の場面で使われる『すみません』」をもう 1 つのトピックとして選んだのは、日韓の文化的な違いについて知ることが学習者にとって有用であると考えたからである。大衆文化にも違いはあるが、私たちはせっかく日本語について勉強しているのだから、日韓の言語文化的相違をトピックにしようということになった。学習者が日本人と接する際に起こりうるミス・コミュニケーションをいくつか挙げ、その中から 1 つに絞った。実際に授業を行ってみて、参加した学習者にとっては内容的に少し簡単すぎたということがあったが、授業後学習者に行ったアンケートによれば、興味深いトピックだったという反応が多かった。

5.2 教壇実習の対象とする学習者について

教壇実習は、経験のほとんどない実習生が媒介語を使わずに日本語のみで授業を行うため、学習者にはある程度の日本語力が求められる。そこで、中級以上の学生（2 年生以上）を対象にすることにした。その中から中級の学習者（2 年生を想定していた）を対象に授業計画を立てたのだが、上級ではなく中級の学習者を選んだのは、日本語で日本語以外の授業を受けることで、日本語を学ぶ動機をさらに高めてもらえたらという考えからであった。

実際の教壇実習は、2 年生から 4 年生の混合クラスで行われたのであるが、「感謝の場面で使われる『すみません』」の授業は、3、4 年生にとってはもちろん、2 年生にとっても簡単すぎたようだ。津崎先生からは、2 年生の前期だったらちょうどよかったのではないかというコメントをいただいた。

今回のことから、学習者の日本語のレベルをどのように把握するかということの難しさを知った。中級といわれても、実際に話してみるまではどのくらいの日本語能力があるのかは漠然としていた。実際の授業で使用されているテキストを送っていただいて参考にすることができたが、テキストで学習項目を完璧に習得している学生はいないはずであるので、テキストだけに頼ってレベルを考えることもできないだろう。カリキュラムの中で体系的に行われる日本語の授業と異なり、学習者のレベルを実感できないまま準備を進めていかねばならないのは大変だが、想定したレベルと違ってそれでもそれに臨機応変に対応できるということも日本語教師に求められる資質である。そのためには、授業のトピックについてもっと深く、広く勉強をしておかねばならないということを実感した。授業のトピックについてだけではなく、普段から教養を身につけておくことが大切だと痛感した。

5.3 実習形態について

教壇実習は、3. 教壇実習の概要 でも述べたとおり 5 人の実習生を 2 グループに

分けるという形で行った。こうすることで、少人数クラスでかつ、多くの学習者に参加してもらうことができると思ったからである。しかし、学習者のレベルによって内容の異なる授業を行うということも一案として考えてもよいだろう。

また、1クラスの実習形態としては、中心となって授業を進めていくのは一人で、残りはアシスタントとしてサポートした。板書をしたり、モデル会話をしたり、教材を用意したりという役に徹した。それでも、教壇で複数の人間が動くことは学習者の注意が散漫になってしまう危険も伴う。従って複数で授業をする時は、できるだけ無駄な動きを省き、学習者の集中を妨げないようにすることが大切だと思った。しかし、実際の日本語教師はほとんどの場合一人で授業を行わなければならない。そう考えると、実習生の経験としては完全にひとりで授業を行った方がいいのかもしれない。このことについても今後検討する余地があるだろう。

5.4 授業内容について

次に、実際行った教壇実習から得られた反省や気づきについてももう少し細かく述べていきたい。「松本・信州大学事情」では、学習者のニーズについてもっと考え、それに沿った準備をしっかりとってくるべきだったという反省点がまず挙げられる。学生の生活にもっと密着した話題を多く盛り込むべきであった。特に留学生の生活や、学生全体の中で留学生の占める割合や出身国についてなどの基本的な知識が欠けていた。

また、ビデオを教材として用いたのだが、ビデオの撮り方について誰もきちんと勉強していなかったため、ぶれが激しかったり雑音が多かったりと、大変見苦しい映像となってしまった。しかし、視聴覚教材を用いたこと自体は、学生の興味を引き付けられ、よかったと思う。それでも、松本や信州大学についての情報を得ることに「浸りきって」もらうには、もっと多くの教材を準備していくべきであったと反省している。教材はビデオと地図のみであったため、単調な授業になってしまったかもしれない。実際に手に触れられるものを持っていくともっと興味を持ってもらえたかもしれないし、質問もたくさん出たかもしれない。

「感謝の場面で使われる『すみません』」の授業では、先にも述べたが参加学習者にとって簡単すぎる内容となってしまった。「松本・信州大学事情」の時もそうであったが、授業がスムーズに進みすぎて予定していた時間よりもだいぶ早く終わってしまったのだ。これは、授業案を作る時に、学習者に理解してもらえらるだろうか、上手く説明できないのではないかという不安から、一つ一つの活動に時間を取りすぎていたこともその原因であると思う。そこへ、学習者が当初予定していた2年生ではなく、2から4年生の混合クラスになったというハプニングが重なり、余計時間が余ってしまったのだ。しかし、このような時間をいかに有効利用できるかが、教師の腕の見せ所であると思う。日本語をしっかりと研究することの大切さ、幅広い教養の大切さを知っ

た。

5.5 実習日時について

2. 韓国日本語教育実習の概要 や、3. 教壇実習の概要 でも触れたが、教壇実習は交流週間の後半にまとめて行われた。しかし、理想としては火曜日に「松本・信州大学事情」と「感謝の場面で使われる『すみません』」の一回目を行い、水曜日一日開けて木曜日に「感謝の場面で使われる『すみません』」の二回目を行いたかった。水曜日の交流の時間が、自然と授業の復習の時間や授業で生じた疑問などを友達と話し合う時間となり、新たな気持ちで木曜日の授業に望めたのではないだろうか。今回は、こちらの連絡等の不手際により日程が上手く組めなかったが、この反省を次回に生かしてもらいたい。

6. おわりに

これまで、カトリック大学校と信州大学の日韓学術交流を韓国日本語教育実習という観点から捉え、その反省を述べてきたが、最後に実習生としての正直な感想を述べさせていだきたい。韓国行きが近づくにつれて時間的にも精神的にも、どんどん余裕がなくなってきて、目の前の課題をこなしていくことで精一杯だった。そんな中、この実習がもたらす意義や、教壇実習の交流週間の中での位置付けなど、鳥瞰図的な視点をほとんど忘れて、授業案や教材作成に没頭してしまった。それが原因で、さまざまな不手際が生じたとも言える。しかし、私は今回の実習に実習生として参加することができたことが本当に嬉しいし、誇りに思う。毎日のように集まって夜遅く（朝早く？）まで議論し合い、運命を共にした実習生の仲間にあたためて感謝したい。また、様々な面で協力してくださったゼミ生のみなさん、沖先生、そしてこのような貴重な経験を与えて下さったカトリック大学校のみなさまに、心より感謝申し上げたい。

韓国日本語教育実習をふりかえって

信州大学人文学部 4 年 前澤美樹（日本語教育学専攻）

1. 実習の目的と意義

日本語教育の現場を拝見し、日本語教育に携わる先生方にご教示いただき、さらに国際交流の場を借りて教壇実習をも経験するという目的があった。春から沖裕子先生は J. V. ネウストプニー氏の『新しい日本語教育のために』のうちに書かれていた「イマージョン教育」をキーワードとして取り上げていた。この実習はプログラムまではいかなかったが、韓国人学生にとっては日本語しか使えない場面に囲まれ、日本語でコミュニケーションする必然性に富んだ期間となっただろう。韓国の学生にとっては母語話者の日本語で「信大・松本事情」を聴き、お礼の場面で使われる「すみません」のしくみについて知る、私達日本人の接待もすべてが日本語という、日本語ばかりの 1

週間を送ることとなった。

2. 実習にむけての準備

2. 1 学習項目の決定と自主ゼミ

教壇実習の機会を与えていただき、さて何を教えればよいのか。教科書を用いた実習ではないし、相手は中級学習者であった。最初は初中級学習者を想定し、自分たちの興味や関心を持ち寄り、「松本」と「信州大学」、「お礼の場面で使われるすみません（謝罪的感謝表現）」について韓国の学生に知ってもらおうと決まった。

それからは先行研究を勉強しわれわれ実習生の理解を深め、さまざまな異なる考察や見解があったが、学生たちの前では共通の見解で説明しようと準備した。先行研究を読み深め、自分たちの理解を深め、それぞれに見解が異なっていたがなんとか妥協して統一した。しかしどう韓国の学生に伝えていけばよいのか、社会言語学的なことを前面に出すのか、「すみません」を言うときの日本人の心情はどのようなものか、なぜそのように思うのか、などに限って伝えれば良いのか、ということで悩んだ。

2. 2 模擬授業

計4回の模擬授業を行なった。第一回は3回分の授業内容の流れを提出しただけのもので、目的や目標が明確でなく方向性にかけたものであった。また、謝罪的感謝表現については実習生の中で理解や見解が分かれており、沖先生にご教示いただいた。第二回、三回めは謝罪的感謝表現についてを1時間分ずつ模擬授業をした。教師側の立ち居ふるまいや話し方、板書等の意見を、2・3年生、院生、沖先生にいただき、反省すべき点がいくつもあった。お礼の場面で「すみません」を使うしくみを言語学的な観点から説明したいのか、心情だけで説明するのか、といった問題はこの時点で方向性が決まってきた。

第四回めは全体を端折りながら通した。出発前だったこともあり大きな変更はせずにこれでいくしかない、ということで果たしてどうなるだろうかという不安は消えないままだった。その後、授業案やアンケート、ハンドアウトなどを印刷したり、最終的に持っていく教材の確認等をした。

模擬授業はもっと韓国の学生の実力や既習事項、学年なども考慮して考えるべきだった。授業の流れは確認できたが、学習者の立場に立った流れではなかったと現在と思う。

3. 実習を通じて

3. 1 授業見学

三日めに二つのグループに分かれて授業見学をした。私は津崎先生の中級日語会話を拝見し、途中から授業にも参加した。同年代の女子学生だけでなく、社会人の方々もいらっしやった。授業は地図をみて道順を相手に伝える練習だったが、左右や、か

どにあるのか道の途中にあるのか、など判断するのが難しかった。はじめは韓国人学生同士で説明しあう練習をしていたが、途中から津崎先生の機転により日本人学生に学校付近のおすすめの店への行き方を伝える練習に変更した。学生はかどをいくつ行けばよいか、右か左か、などを実際に自分で思い浮かべることができただろう。

50分という授業時間は見学している立場でもとても短く感じた。教える立場ならもっと短く感じるだろう。だが学習者にとってはこれぐらいがあまりストレスがたまらない時間かもしれない。また、50分という短い時間だからこそテンポが大事になってくることに気がついた。導入からさっさと入り、学生が停滞してしまったら違う風を送りこむ、授業のまとめも切り上げが早い。授業ではあるが指示がとても自然で、会話のように進んでいった。これには席の形も影響があるだろう。大きな円に並べ、必要ならば小円になる。先生は中央にいるかもしくは巡視する。巡視のときに直さなくてはいけない学生の表現が見つかれば黒板に書きみんなに説明する。教えながら学生を観察している津崎先生の動きはとても勉強になった。

3. 2 交流等からの観察

学生と交流していて気がついたことは同じ学年でも年齢が異なることがあるということ、また、学年や年齢に関わらず学生のレベルに差があることに驚かされた。普段は私達とよく会話をし、授業にまじめに取り組んではいるが、授業中はあまり率先して発言するようには見えなかった。しかし二日目のミニドラマの発表会では、演じるほうも見ているほうもとても楽しそうだった。実際の授業でもロールプレイをこんなに生き生きと、気持ちをこめて練習できたら、たしかに効果はあがるだろう。やるとなればしっかりこなす学生が多かったといえる。

また、学生の幾人かに日本語を学習する動機を交流の中で尋ねた。日本の文化や大衆芸能に多くの人が興味があり、日本語を使う仕事に就きたい、という人も多かった。日本語をコミュニケーションの道具の一つとして習っている。今回の日本人学生との交流によって韓国人学生はもっとそのコミュニケーション能力を高めたい、もっと日本人のことをわかり、思っていることを伝えたい、と感じた人は多かっただろう。実際にそういう声をきき、人の心をつなぐ「ことば」の素晴らしさを思った。

3. 3 教壇実習

実習生のメインテーマでもあった教壇実習はほとんどが予想と異なっていた。まず先に述べたように学生のレベルに差があった。そして未習だと思っていた謝罪的感謝表現はすでに知っていた。滞ることなく授業は進み、時間が余った。この予想外に余った時間を学習者にとって無意味なものとしないうためには、学習者が何を知りたいと思っているか判断しなくてはならない。私達はそのニーズには応えていなかっただろう。韓国人学生が好意的に授業を見てくれたことがせめてもの救いだったが、何

を話せば良いか、話は一方通行になってはいまいか、と焦ってばかりだった。自分の用意の足りなさを悔いた。今回は実習生全員にとって臨機応変の必要性を感じ、身につける練習をしたようなものであったのではなかろうか。

4. 今後の実習へむけて

学習者のニーズ調査を行ない、こちらの自己満足の授業だけは避けたい。学生の興味のあることを選んで授業を作っていけたら、お互いに楽しいだろう。また、「相互行為」ということを念頭におき授業でもっと韓国人学生の話す機会を増やしたい。今回の訪問でカトリック大学校の授業形態や学生のレベルや様子が把握できた。模擬授業の際の学生役ももっと具体的になるし、授業計画も立て易くなるのではないだろうか。

事前の準備はしすぎることはないことを実感した。身近なことほど調べ落とすことが多いので、韓国から日本に留学する、旅行する、という身になって考えてみることも大事である。

また視覚教材も多めに準備し、掌中にさまざまなアイデアや話題や知識を持っていく必要がある。これはやはり学習者の立場にたてば、いろいろなことを知りたいはずなのだから、それに応えられるように具体的に韓国事情を調べ韓国人が日本の何に興味を持っているかなどを調べ、用意することもできるだろう。留学生センターでの実習体験も含め、見て、聴いて、感じたものを十分に活用したい。

最後に、私達に教壇実習という貴重な経験、学生との交流という素晴らしい思い出をくださった姜先生をはじめとするカトリック大学校の先生がた、協力してくださった韓国の学生方、そしてご指導、ご引率くださった沖先生に感謝申し上げます。

実習の記録

信州大学人文学部 3 年 平野涼子（日本語教育学専攻）

1. 実習の概要

カトリック大学校、中野先生の日本語の授業を受講している 2,3 年生（1 グループ 4、5 人で計 5 グループ）と信州大学の 2,3 年生 5 名（2 年生 3 名、3 年生 2 名）が行ったものである。1 グループ 10 分間の時間を与えられて信州大学の学生はそれぞれのグループを廻りながら、あらかじめ各自で準備してきた題材を使ってフリートーキングを行った。その際、両者の学生共に多く質疑応答をするように指導を受けた。参考として、私が行った実習について述べる。事前に準備していったものは、日本の地域情報誌（私は関西出身だったのでその地域のもの）、日本地図で長野と私の実家の位置関係を示したもの、家族の写真などである。

実際にフリートーキングの際に使用したのは、地域情報誌と日本地図である。家族の写真などは時間の関係上使うことができなかった。主に使用したのは、地域情報誌

で全てのグループにおいてどんなことに興味があるのか等を尋ねてカトリック大学校の学生が関心のある分野の話題を中心に進めていった。

2. 実習の感想、反省

まず特に感じたことは、カトリック大学校の学生が私の想像している以上に日本についての知識があるということである。しかし、その知識はいずれもそれぞれの学生が興味のある分野であり人によって異なる。学生によっては自分が好きな俳優が出ているテレビ番組をインターネットから検索しておとしたりもしている。私が、実習を行った限りではほぼ全てのグループで知りたいこと、興味のある事柄について音楽、映画、ファッションの分野に集中していたように思う。

反省点としては、各グループの構成が学習者の日本語能力にばらつきがあり、私との会話や学生からの発話がある生徒に集中したところもあったので、もう少し、それぞれの学生にあった質問をすればよかったと思う。今回は、題材のみを事前に準備していただだけで、どのような質問するか、授業展開をしていくかなどについてはあまり深く考えていなかった。教える側は、いろんな角度から様々な関連のある事柄について事前準備をしていくべきだと感じた。

3. まとめ

以上が今回の私が行った実習の記録である。今回の実習は、フリートーキングという形式だった為、同年代の韓国の学生といま彼らが関心のある事柄について同じ視点から話せたことがとてもうれしかった。

沖ゼミ韓国研修旅行 2001「フリートーキング」実習記録

信州大学人文学部 3 年 三間 美奈子 (日本語教育学専攻)

実 習 日 時 : 2001 年 10 月 30 日 (火) 16:00~16:50

実 施 場 所 : カトリック大学校 D434 教室

実 習 者 : 信州大学人文学部 日本語教育学専攻学生

2 年 門脇恵利子・向出真理子・矢嶋直子 3 名

3 年 平野涼子・三間美奈子 2 名

授業参加学生 : カトリック大学校 日語日本文化学科の学生 約 25 名

指導担当教官 : 中野 敦先生 (カトリック大学校)

実 習 形 態 : 中野先生の授業時間をおかりする形で実施。学生の参加は自由で、学年もバラバラである。カトリック大学校の学生 4~5 名を 1 つとし、5 つのグループをつくる。そこへ信州大学の学生 1 名が入り、日本語で自由に会話を進める。10 分経過後、次のグループへ移り全グループをまわる。

実 習 内 容：

グループ①

- ・実習者とほとんどの学生は初対面
- ・お互い初めで緊張している

自己紹介。趣味の質問があったので、用意していた華道のテキストを示し説明。会話はあまりはずまず、華道への関心も高くない様子。

グループ②

- ・実習者は少し緊張がほぐれてきた

自己紹介。華道の話はやめる。文学を専攻している学生がいたので、自分のことより相手への質問中心。

グループ③

- ・唯一男性1名含む
- ・自己紹介。実習者が興味のあるアクセサリーの流行について、韓国の状況を質問。日本への留学経験者がおり、その学生を中心に会話が進む。日本の雑誌などをみているそうである。日本で今流行っている「ファー」は、韓国では数年前に流行ったとのこと。「ファー」の語源を聞かれたが、答えられず。その他、車で通学していることに興味をもってくれた。留学経験者の学生中心に話が盛り上がったが、その他の学生の発話はほとんどなかった。

グループ④

自己紹介。家族の写真を見せる。姉の子どもの七五三の写真であったので、説明。ここにも語学以外の専攻の学生がいたので、韓国の学校における外国語教育システムについて質問。

グループ⑤

- ・授業前に実習者と面識のあった学生中心
- ・自己紹介はほとんどなし

日本語能力は全体的にかなり高く、会話の主導権はどちらかというと学生側。実習者の名前の読み方で盛り上がった。日本のコメディアンの説明を学生同士でする。一番盛り上がったグループ。

実習の反省

私のグループのまわり方が、日本語能力の初級レベルから上級へととなっていたせいも大きいと思うが、初めのグループは表情が硬く、質問もある程度決まったものであった。とても真剣な表情で聞いてくれていたので、日本語の理解に集中していたのではないと思う。自分自身も初めのグループは、若者のあまり関心のない話題を提示してしまった。これが別のことであったら、変化があったかもしれない。参加者の分

析が甘かった。

日本語の使用について、日本特有文化の説明は、いかに一般的な語彙を使うかが問題となった。理解してもらえなかった時の言い換えの語彙も自分の中に蓄えておく必要を感じた。それと同時に、学習者のレベル別習得語彙の把握もしておかなければならず、あらゆる面で準備不足であった。

また、1対複数という中で、積極的な（日本語能力の高い）学生以外の参加者の会話への引き込みに対する配慮があまりできなかった。

実習的には準備が全くできていず失敗に近かったが、この実習をしたことによって、カトリック大学校の学生との距離が近くなったような気がした。同年代（実際には少し下）の学生同士ということで、互いに相通じるものがあった。緊張はあったものの笑顔ですすめられたのは、そのお陰である。それに甘んずることなく、技術的にも成長するように今後、学んでいきたい。

実習を振り返って

信州大学人文学部2年 門脇 恵利子（日本語教育学専攻）

韓国では2,3年生は自己紹介・フリートークというかたちで実習を行った。これらはカトリック大学校の学生さんたちが5つのグループに分かれ、そのグループを私たちが順番にまわって話をするという形で進められた。ひとつのグループでの時間は10分ほどであった。

事前準備の段階では10分という時間はかなり長く感じられ、一体何について話せばいいのだろうかとかかなり悩んだりもした。しかし、実際話し始めてみると自己紹介とは言いつつも話を進めるのは私一人というわけではなく、会話によって進めていくことができたので、思っていた以上にいろいろなことについて話をすることができた。

自己紹介・フリートークのために私が用意していたものは次のものである。日本のファッション雑誌、趣味の一つである写真、そして日本地図、プリクラ。特に日本地図と写真は話を広げるのにとても役立った。自分の出身地を説明するときに地図で「ここ」と指して言うことができたので伝わりやすかったということもある。ただ、大変だったのは「わかりやすい日本語」で話すということであった。特に名詞の言い替えには苦労した。動詞の場合であるならばある程度別の言葉に言い換えることはできたのであるが、名詞になると普段言い替えて使うということをしていないために、別の言葉で言い換えるというということがなかなかできなかった。通じなかった言葉（辞書に載っているような説明で理解してもらえなかったとき）について、どういう方向から持っていけば理解してもらえるかということ（たとえば似たような例を出す、似たような例ではどういうものがあるかということなど）をもっと考えていかないと

いけないと思った。

また強く思ったことは、いくらいろいろなことを話していても表面的なことばかり話しているうちは話が弾まないということだった。自分を出していく、心を開いていくということはなかなか簡単にできることではないが、特にこのように短い期間で本当に交流しようとするならば、このことはとても大事なことでありと身を持って感じた。

終わってみれば長いと思っていた10分間はとても短く、そしてとても楽しいものだった。来年もぜひあればいいなと思う。

韓国研修旅行・実習を振り返って

信州大学人文学部2年 向出真理子（日本語教育学専攻）

今回の研修旅行の大きな趣旨として、4年生の日本語教育実習が組み込まれていた。それに対し2・3年は、韓国入学生グループ内で自己紹介とフリートーキングを行うという授業時間を与えられた。私はむこうの学生は私たちにどんなことを聞きたいと思っているか、また逆に自分がどんなことを聞きたいかを考え、これまでに日本国内で旅行したときの写真や、ディズニーランドなどのガイドブックを用意した。また私は日本語を勉強している韓国の学生とは反対に韓国語を勉強しているので、ふだん使っている教科書も持って行って互いに比べてみたいと思った。

準備できることはして韓国に出発したものの、いざ実習の時間が迫ってくるとやはり緊張と不安が押し寄せてきた。時間はカトリック大学校の授業1コマ分の予定だったが、それでも時間があまってしまったらどうしようということや、自分の言葉を意識して話さなければならないというのは、私にとって今までそんなに経験がないことも理由の一つだった。しかし授業が始まってしまうと、落ち着いて参加することができた。1グループで10分、5グループをまわるというのは、思っていたのに反して時間がすぐに過ぎていった。前日の歓迎会で少し仲良くなっていた子もいたり、3・4年生も私のほうに興味に満ちた目を向け、話をきいてくれた。一方で反省すべき点もいくつかある。まず10分という時間の中でテーマをしぼって話ができなかったことである。写真やガイドブックなど用意したものの全部を見せたい、はなしたいと思っていたとすぐに時間が経ってしまい、終わってみれば広く、浅くの内容になってしまった。また私が話す側にまわってしまったことが多く、韓国の学生から話を聞くことがあまりできなかった。特にまだ日本語学習が進んでいない学生のグループでは、私の話と写真などを見るだけになっていた。話したことが理解されているかの確認や、それに対して何か質問はないか、韓国ではどうかなどを聞いてみたり、こちらの側からの働きかけが必要であったように思う。そして同じ内容を話すにしても、グループやその

日本語の能力に合わせた話し方をもっと意識すべきであった。

振り返ってみると相手の話をよく聞き、その上で相手に合わせた話し方をするというのは実習中に限らず、それ以外の場でも共通していえることである。話を聞き流すことはもちろん、聞き流されるようなことは決してあってはならない。実習だけでなく今回の旅行全体を通して自分の母語である日本語を、学習者である相手にいかに平明な形で伝えるかということの難しさを実感した。この経験と反省をもとに今後の勉強と、来年にいかせるようにしたい。

実習を終えて

信州大学人文学部 2 年 矢嶋直子（日本語教育学専攻）

今回 2・3 年生の実習は韓国人学生の 4～5 人のグループをまわり、自己紹介することでした。自己紹介で話すことは日本でも考え、写真も見せながら話すことにしました。直前になってもあまり緊張せず、知り合いになった人も見られ少し安心していました。はじめは生まれた場所について地図を見せながら紹介し、趣味や茶道について話そうと思っていました。しかし 1 グループ目から茶道の精神などを聞かれ、生半可な知識で話すべきではなかったと後悔しました。その後のグループからは生まれた所、今住んでいる所について紹介してから何を話せばいいのか分からなくなってしまい、どの話も中途半端で終わってしまいました。

終わってからなぜこんなことになってしまったかを考えた時に、自分がどんな人間か結局話せていなかったと感じました。中途半端に日本の文化に関する話も話そうと思い写真も持っていったりしましたが、それは私自身の紹介ではなくなってしまいました。現在の私にはこれができる、と自信を持ってということや、これは本当に好きだ、と紹介できるものがなかったために中途半端になってしまったのだらうと思います。多少知っている事やなんとなく好き、という今の自分の状況をはっきりと思い知らされ、自己紹介の難しさに気付かされました。

今「私」をほかの人に知ってもらうにはどうすればいいかを考えているのですがまだよくわかってきません。ただ、自己紹介するときに私はそれぞれの人の前にいて、実際に話しているのだから私がどんな人間かはそれぞれの人によって違うのだとやっと気付きました。私の話す趣味についても興味のあることもそれにくっついていくだけなのだと思います。それに興味を持ってくれたり、同じ好きなことだったりしたとき、またそれぞれの人の中での「私」ができてゆくのだと思います。今回の経験から、好きなものや興味のあることも紹介できるくらいに深く知り、「私」といえるようなことを見つけていきたいです。